2/3 _{Sat}

第264回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール 14時開演

SATURDAY MATINÉE SERIES No. 264 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

2/4 _{Sur}

第264回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール 14時開演

SUNDAY MATINÉE SERIES No. 264 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

演奏会用ワルツ 第1番 二長調 作品47 [約11分] -p.9

交響曲 第104番 二長調 〈ロンドン〉 [約29分] -p.10

サクソフォン協奏曲 作品50 [約16分] -p.11

Concerto for Alto Saxophone and Orchestra, op. 50

指揮

Principal Guest Conductor

サクソフォン Saxophone

特別客演コンサートマスター

Special Guest Concertmaster

グラズノフ GLAZUNOV

02 120.101

ハイドン

Concert Waltz No. 1 in D major, op. 47

Symphony No. 104 in D major, "London"

山田和樹(首席客演指揮者)-p.5

Adagio – Allegro

KAZUKI YAMADA

上野耕平 -p.6

KOHEI UENO

日下紗矢子

SAYAKO KUSAKA

II. Andante

III. Menuet: Allegro

IV. Spiritoso

[休憩]

[Intermission]

カプースチン

KAPUSTIN

STIN

ラヴェル RAVE **ラ・ヴァルス** [約12分] -p.12

La Valse

主催:読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

芸劇&読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー プレコンサート

2月4日(日)の《第264回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13時25分から、「芸劇&読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレコンサートをコンサートホールで開催します。

2/9

第635回 定期演奏会サントリーホール 19時開演

SUBSCRIPTION CONCERT No. 635 / Suntory Hall 19:00

指揮

Principal Guest Conductor

尺八 Shakuhachi

> 琵琶 Biwa

コンサートマスター Concertmaster 山田和樹(首席客演指揮者)-p.5

KAZUKI YAMADA

藤原道山 -p.6

DOZAN FUJIWARA

友吉鶴心 -p.7 KAKUSHIN TOMOYOSHI

林 悠介

YUSUKE HAYASHI

バルトーク BARTÓK 弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽

BB114 [約27分] -p.13

Music for Strings, Percussion and Celesta, BB114

I. Andante tranquillo

II. Allegro

III. Adagio

IV. Allegro molto

[休憩]

[Intermissio

武満 徹 TAKEMITSU **ノヴェンバー・ステップス** [約19分] -p.14

November Steps

ベートーヴェン

交響曲 第2番 二長調 作品36 [約32分] -p.16

Symphony No. 2 in D major, op. 36

I. Adagio molto – Allegro con brio

II. Larghetto

III. Scherzo: Allegro

IV. Allegro molto

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))

太元帝 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力:アフラック生命保険株式会社

2/13 Tue

第670回 名曲シリーズ サントリーホール 19時開演

POPULAR SERIES No. 670 / Suntory Hall 19:00

 $2/14_{\text{Wed}}$

第37回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール 19時開演

SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No. 37 / Festival Hall 19:00

指揮

Principal Guest Conductor KAZUKI YAMADA

ヴァイオリン Violin

コンサートマスター

Concertmaster

山田和樹 (首席客演指揮者) -p.5

シモーネ・ラムスマ -p.7

SIMONE LAMSMA

長原幸太

KOTA NAGAHARA

R. シュトラウス

交響詩〈ドン・ファン〉作品20 [約17分] -p.18

Don Juan, op. 20

11. 3111A03

ブルッフ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品 26 [約 24 分] -*p.19*

Violin Concerto No. 1 in G minor, op. 26

- I. Prelude: Allegro moderato II. Adagio
- III. Finale: Allegro energico

[休憩]

[Intermission]

フランク

交響曲 二短調 [約37分] -p.20

FRANCK

Symphony in D minor

- I. Lento Allegro non troppo
- II. Allegretto
- III. Allegro non troppo

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))

^{太元命} 独立行政法人日本芸術文化振興会 (2/13)

特別協賛: 非破壊検査株式会社(2/14) 協力: コジマ・コンサートマネジメント(2/14)

※2/13公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

指揮

山田和樹

(首席客演指揮者)

KAZUKI YAMADA, Principal Guest Conductor

首席客演指揮者 "ヤマカズ"が挑む 渾身の最終公演



3月末で首席客演指揮者を退任する山田和樹が、2018年の就任から約6年間の一つの区切りとして、3つのプログラムを披露し、有終の美を飾る。

東京芸術大学指揮科で小林研一郎、松尾葉子に師事。2009年のブザンソン国際指揮者コンクール優勝を機に、欧州でのキャリアをスタート。ベルリン放送響、サンクトペテルブルク・フィル、パリ管、フランクフルト放送響、フィルハーモニア管、ドレスデン・フィル、BBC響、チェコ・フィルなどに客演。12年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本では、小澤征爾の代役として〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉を振った。17年に〈魔笛〉でベルリン・コーミッシェ・オーパーにデビュー以降、モンテカルロ歌劇場での〈ヴォツェック〉などオペラでも活躍。23年にはバーミンガム市響とBBCプロムスに再登場し、日本およびドイツ、スイスでのツアーを成功に導いたほか、ザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭やボストン響とのタングルウッド音楽祭へのデビューを果たした。

スイス・ロマンド管首席客演指揮者を経て、現在バーミンガム市響の首席指揮者兼アーティスティックアドバイザー、モンテカルロ・フィル芸術監督兼音楽監督、東京混声合唱団音楽監督兼理事長、横浜シンフォニエッタ音楽監督。渡邉曉雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、モナコ公国の文化功労勲章シュヴァリエなど受賞・受章多数。多くのCDをリリースしており、20年には読響との『マーラー:巨人』が発売された。ベルリン在住。

// J

2/4

2/9

2/13

2/14 大阪定期

日曜マチネー

土曜マチネー



サクソフォン 上野耕平 KOHEI UENO, Saxophone

サクソフォン界の未来を切り拓く俊英。東京芸 術大学卒業。日本管打楽器コンクールに史上最年 少で優勝、アドルフ・サックス国際コンクール第2 位など受賞多数。世界サクソフォン・コングレスに ソリストとして出場するなど、国内外の楽団と共演 を重ねている。読響とは2020年1月に下野竜也 指揮で共演し、ジョン・アダムズのサクソフォン協 奏曲を披露し絶賛された。23年にアルバム「Eau Rouge」をリリース。NHK-FM「×(かける) クラ シック」司会のほか、テレビ「題名のない音楽会」「情 熱大陸」などにも出演。「ザ・レヴ・サクソフォン・ クヮルテット」メンバー、吹奏楽「ぱんだウインド オーケストラ」コンサートマスターとしても活躍中。 鉄道と車もこよなく愛し、深く追求し続けている。



琵琶 友吉鶴心 KAKUSHIN TOMOYOSHI. Biwa

幼い頃よりさまざまな文化・芸能の稽古を受け、 両祖父の偉業である薩摩琵琶の発展を志す名手。 武満徹の代表作〈ノヴェンバー・ステップス〉の初 演で琵琶を担当した鶴田錦史に師事。文部大臣奨 励賞・NHK会長賞など受賞。多様なジャンルにお いて国内外で活躍中。日本文化芸能普及の一環と して五世野村万之永の推挙によりNHK大河ドラマ 「天地人」の琵琶・和歌朗詠指導や、「平清盛」「真 田丸」など数々の作品の芸能考証を務めるほか、 NHKテレビ、ラジオにも多数出演。またゲーム音 楽などに楽曲提供も行う。山田和樹、アルミンク らの指揮で、新日本フィルなどと共演。農林水産省 ありが糖大使。台東区観光大使・アートアドバイ ザー。ACT.JT理事。日本スイーツ協会理事。日 本大学芸術学部音楽科非常勤講師。



10歳より尺八を始め、初代山本邦山(人間国宝) に師事。伝統音楽の活動とともに、国内外のアー ティストとの共演など尺八の可能性を求めさまざ まな音楽を追求。東京芸術大学卒業、同大学院音 楽研究科修了。在学中、皇居内桃華楽堂にて御前演 奏。芸術選奨文部科学大臣賞、第五回服部真二音楽 賞ほか受賞。マリンバ奏者SINSKEとのデュオ、妹 尾武 (ピアノ)、古川展生 (チェロ) との「KOBUDO 一古武道一」、尺八アンサンブル「風雅竹韻」など のユニット活動、舞台音楽、音楽監修など多岐に わたる活動を展開中。藤倉大作曲の尺八協奏曲を 2022年にブルターニュ管と、23年にN響と共演。 現在、公益財団法人都山流尺八楽会所属・大師範。 都山流道山会主宰。日本三曲協会会員。東京芸術



尺八 藤原道山 DOZAN FUJIWARA. Shakuhachi

ストラディヴァリウスの艶やかな音色で観客を 魅了し続けるオランダの名花。メニューイン音楽 院と英国王立音楽院で学び、インディアナポリス 国際コンクールなど多くのコンクールで入賞。こ れまでにズヴェーデン、パッパーノ、ガベル、ネゼ = セガン、アルブレヒト、ロト、V. ユロフスキなど の指揮者、ロイヤル・コンセルトへボウ管、シカ ゴ響、ニューヨーク・フィル、クリーヴランド管、フ ランス放送フィル、ベルリン放送響などのオーケス トラと共演。ウィグモア・ホール、カーネギー・ホ ールなど、世界の著名ホールでリサイタルを開催。 チャレンジ・クラシックスからリリースされたCDも 高い評価を得ている。使用楽器は、1718年製の ストラディヴァリウス「ムイナルスキ」。



ヴァイオリン

シモーネ・ラムスマ

SIMONE LAMSMA, Violin

グラズノフ

演奏会用ワルツ 第1番 二長調 作品47

今回の《土曜・日曜マチネーシリーズ》はワルツで始まりワルツで終わる。冒頭を飾るのはロシアの作曲家アレクサンドル・コンスタンティノヴィチ・グラズノフ (1865~1936) の〈演奏会用ワルツ第1番〉である。グラズノフの作品は最近の日本ではあまり演奏されないようだが、バレエ曲〈ライモンダ〉と〈四季〉は有名で、バレエ・ファンにはお馴染みだろう。他に交響曲など大規模な作品も多く、名手ハイフェッツが愛奏した〈ヴァイオリン協奏曲〉もよく知られている。亡命先のパリで書かれ、最後の作品となった〈アルト・サクソフォンと弦楽オーケストラのための協奉曲〉(1934年) はサクソフォン愛好家にとって親しみ深いはず。

グラズノフはサンクトペテルブルクで生まれ、ロシア五人組のバラキレフやリムスキー=コルサコフに音楽的才能を評価された。16歳の時に〈交響曲第1番〉を書いたが、その初演の指揮を担当したのはリムスキー=コルサコフだった。その後、裕福な材木商人であったベリャーエフに認められ、彼の支援のもとで数々の演奏会を開いて、ロシア国外でも名を知られるようになる。そして1905年にはペテルブルク音楽院の院長に就任。そこではストラヴィンスキー、ショスタコーヴィチなど若い才能を支援した。

グラズノフが書いた〈演奏会用ワルツ〉は2曲あるが、第1番は1893年、第2番は94年の作曲で、この第1番はリムスキー=コルサコフに献呈された。演奏会用とあるから、いわゆる舞踏会のための音楽ではなく、コンサートの幕開けなどのために書かれたと考えられるが、グラズノフのバレエ曲を彷彿とさせるような軽快な3拍子、移り変わっていく音楽の様々な表情、それを見事に表現する管弦楽法など、彼の音楽的な才能の豊かさをこの小さな作品の中でも感じることができる。

〈片桐卓也 音楽ライター〉

作曲:1893年/初演:不明/演奏時間:約11分

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール)、ハープ、弦五部

日曜マチネー

ハイドン 交響曲 第104番 二長調 (ロンドン)

交響曲の父と呼ばれるフランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732~1809) は106曲 もの交響曲を残した。その中で番号が付けられているのは104曲で、最後に位置 するのがこの交響曲第104番 二長調である。ハイドンは1761年にハンガリー有 数の貴族であるエステルハージ家の副楽長の職を得た。その後、ほぼ30年間に わたり同家に仕え、とりわけニコラウス・ヨーゼフ・エステルハージ (ニコラウス公) のもとで活動した。前任のヨーゼフ・ヴェルナーが退任すると、86年に楽長に昇進した。

ニコラウス公が亡くなると、年金を与えられ、作曲に追われる生活からようやく抜け出すことができた。そこで、興行主であったヨハン・ペーター・ザロモン(ドイツのボン生まれ)の招きに応じてロンドンを訪問し、その地で連続して新作交響曲を披露するコンサートを開催した。それは1791~92年と94~95年に行われ、現在ハイドンの傑作として知られる交響曲の数々が初演された。

第104番の交響曲は95年にロンドンで書かれたハイドンの終わりを飾る交響曲である。〈ロンドン〉の愛称は19世紀に付けられたもので、ハイドン自身の命名ではない。第1楽章は壮麗さを感じさせるアダージョ(二短調)で始まり、優雅な主部(アレグロ、二長調)に入る。第2主題(イ長調)は木管楽器と弦楽器による。第2楽章はアンダンテで変奏曲形式。いくつかの意外な転調を含んでいる。第3楽章はアレグロ(二長調)のメヌエット。活発な踊りを感じさせる音楽である。トリオの部分は変ロ長調となり、弦楽器と共に木管楽器が活躍する。第4楽章はスピリトーソ(快活に)と指示されたフィナーレ。冒頭ではバグパイプを思わせる低い音(ドローンと呼ぶ)で始まり、その上に主題が歌われる。快活で、力強さも感じさせるフィナーレである。

〈片桐卓也 音楽ライター〉

カプースチン サクソフォン協奏曲 作品50

ニコライ・ギルシェヴィチ・カプースチン (1937~2020) はウクライナ出身の作曲家である。クラシック音楽とジャズを融合したとも言われる独特の作風を持つ人で、近年では〈8つの演奏会用練習曲〉(1984年) など、彼のピアノ曲が様々なピアニストによって演奏・録音され、注目を集めている。

カプースチンはモスクワ音楽院でピアノを学んでいたが、その時期にラジオ放送ヴォイス・オブ・アメリカ (VOA) でジャズを聴くようになった。音楽院卒業後は国立ジャズ音楽室内管弦楽団、ソビエト連邦テレビ・ラジオ軽音楽管弦楽団などに参加しながら、自作を発表していった。1977年にはロシア国立映画交響楽団に参加したが、84年にそこを退いてからは作曲活動と自作の録音に専念した。作品としてはピアノ曲が多いが、協奏曲もピアノ協奏曲6曲、チェロ協奏曲2曲、ヴァイオリン協奏曲1曲など多作で、室内楽も多い。

この〈サクソフォン協奏曲〉は1987年の作品である。お聴きいただけばわかるように、通常のオーケストラに加え、ギター、ベースギター(共にエレクトリック)、ドラムセット、ボンゴ、そしてハープとピアノが加わり、かなり大規模なジャズ・バンドとも言える編成で、単一楽章の作品だ。

冒頭は低弦とピアノ、そしてティンパニのトレモロの上でアルトサクソフォンが歌い出す。テンポはレントで、静かだが、どこかに情熱を秘めたような音楽が展開されていく。次いでswingingと書かれた部分に入り、ここではスウィング・ジャズを思わせるようなリズムの中でサクソフォンが歌い続ける。さらにテンポを上げていき、スウィングからより進んだビバップのスタイルを取り入れたジャズの世界が展開される。いったんは冒頭のレントの部分が再現されるが、最後はアレグロ・モルトとなり、ドラマティックに盛り上がっていく。

〈片桐卓也 音楽ライター〉

作曲: 1987年/初演: 2002年5月、モスクワ(管弦楽版・録音)/演奏時間: 約16分 楽器編成/フルート、ピッコロ、オーボエ、クラリネット、バスクラリネット、ファゴット、ホルン3、トランペット4、トロンボーン4、ティンパニ、打楽器 (ボンゴ、ドラムセット)、ギター、ベースギター、ハーブ、ピアノ、弦五部、独奏アルトサクソフォン

弦五部



り/4

Prouram Notes

ラヴェル ラ・ヴァルス

フランス語でワルツは「valse」と書く。ちなみにウィンナ・ワルツは「valse viennoise」だ。20世紀初頭のフランスで活躍したモーリス・ラヴェル(1875~1937)の〈ラ・ヴァルス〉は、まさにそのワルツをテーマにした大規模な管弦楽曲である。作曲時期は1919~20年であるが、その音楽の構想は長くラヴェルのなかに眠っていた。

この作品について最初にラヴェルが言及したのは、1906年のジャン・マルノール (批評家) 宛の手紙のなかで。ヨハン・シュトラウスへのオマージュとなるようなワルツを書くことを計画している、と打ち明けている。14年には〈ウィーン〉というタイトルの交響詩として構想されていた。しかし第一次世界大戦の混乱とラヴェル自身の健康の問題で、それも実現しなかった。

17年にバレエ・リュスの主宰者ディアギレフがラヴェルのもとを訪れ、新しいバレエ曲を依頼した。ラヴェルはそれを受けて、あらためてこの作品に取り組んだ。ラヴェルはこれを「舞踏詩」として書き上げ、まず2台ピアノ用に編曲した版を、ミシア・セール邸においてディアギレフに聴かせた。しかし、ディアギレフは「バレエには不向き」として、この作品の受け取りを拒否。結局、ラヴェルは20年10月のウィーン訪問時にピアノ2台版を初演。管弦楽版は同年パリで初演された。

ラヴェルは初版楽譜にこの音楽についての文を寄せている。それによれば、音楽の展開は以下のようになる。まず渦巻く雲のなかからワルツを踊る男女の姿が次第に浮かび上がり、その後に群衆で埋め尽くされたダンス会場、さらにシャンデリアの光り輝く様子が描かれる。舞台は1855年頃のウィーンの宮廷。

直嵌ぐような空間移動と時間旅行を、ラヴェルの磨き抜かれた手法によるワルツに乗って経験してみよう。

〈片桐卓也 音楽ライター〉

作曲: 1919~20年/初演: 1920年12月12日、パリ(管弦楽版)/演奏時間: 約12分楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、銅鑼、クロテイル、カスタネット)、ハープ2、弦五部

バルトーク 弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽 BB114

20世紀の西洋音楽史上、最大のパトロンはスイスの指揮者パウル・ザッハー (1906~99) だ。富豪との結婚によって莫大な資産を手にいれ、それを楽壇の発展のために惜しみなく使う。ストラヴィンスキー、オネゲル、ヒンデミット、ヘンツェ、そして武満徹らが、ザッハーの委嘱で作品を書いた。

ベラ・バルトーク (1881~1945) もその恩恵に与った作曲家のひとり。バルトークは1936年夏、ザッハーから作曲の依頼を受けた。バルトークはそれに応じ、〈弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽〉の現行版に近い楽器編成を返信で示す。すでに同作品の構想を練っていて、それを今般の委嘱にふさわしい曲と判断したのだろう。

作曲家は同年9月初旬に脱稿した楽譜をすぐにザッハーに送った。ザッハーは早くも11月、年明けの本番に向けてリハーサルを開始。両者の熱意は初演で実を結ぶ。 批評家の多くが、この曲をバルトークの代表作と認めた。

曲は4楽章制。作曲家は、2群からなるオーケストラ編成とその舞台配置、および各楽章の厳密な演奏時間を楽譜上に明示している。

第1楽章 変拍子のフーガ。主題は完全5度の音域に収まる8つの音でできている。 結果、旋律は半音階気味になる。以後、この主題が全曲を束ねる"かすがい"に。 拍子の目まぐるしい変化は、言葉を発話するときの不規則な長短とよく似ている。

第2楽章 冒頭は前楽章の主題のヴァリアント(変形)。この楽章の拍節は当初、 規則的な2拍子で、そこに時折3拍子が混じる。やがて規則性は崩れていくが、し ばらくすると秩序を取り戻す。しかし、それは3拍子に変容している。

第3楽章 5部分がABCBAの順で並ぶ回文形式。これはバルトークに顕著な個人様式だ。第1楽章の主題の断片が各部をつなぐ。

第4楽章 隣り合った音に滑らかに進む旋律を、変奏しつつ繰り返すロンド形式。 後半、アクセルとブレーキの大胆な踏み替えで、活気を湛えつつ曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲:1936年/初演:1937年1月21日、スイス・バーゼル/演奏時間:約27分 楽器編成/ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、シロフォン、銅 鑼)、ハーブ、チェレスタ、ピアノ、弦五部 武満徹 (1930~96) は1966年、ニューヨーク・フィルハーモニック (NYP) から作曲の委嘱を受けた。楽団の125周年を記念する作品として、邦楽器とオーケストラのための曲を書くようにとの依頼だった。作曲家とNYPとをつないだのは小澤征爾だ。小澤は当時、同団正指揮者のレナード・バーンスタインを補佐する副指揮者。武満がその年の春に発表した琵琶と尺八のための〈蝕(エクリプス)〉を、バーンスタインに聴かせつつ、この作曲家への依頼を進言する。バーンスタインは18人いる委嘱先のひとりとして、武満を指名した。

作曲家は1967年に〈ノヴェンバー・ステップス〉を書き上げ、NYPの演奏会に 提供する。初演は同年11月9日、ニューヨークのリンカーン・センターにあるフィル ハーモニック (現デイヴィッド・ゲフィン)・ホールにて。小澤の指揮するNYPが、ベートーヴェンの交響曲第2番、ヒンデミットの〈画家マティス〉とともに披露した。 本日のプログラムはその一部を再現している。

武満は58年から自らの作品に邦楽器を取り入れ始めた。65年までにラジオやテレビ、映画の劇伴音楽として、邦楽器を使った曲を8つ書いている。翌年、とうとう劇伴から離れ、純然たるコンサート・ピースとして、先述の〈蝕(エクリプス)〉を作曲するにいたる。この作品で武満は、琵琶と尺八を用いた。これは日本の伝統音楽にはない異例の組み合わせだ。

オーケストラ曲に目を向けると、〈樹の曲〉(1961年)における、声部をリレーしていくような書きぶりや、〈テクスチュアズ〉(1964年)での、各パートを細分化して密集した和音を作り上げていく書法に、武満の管弦楽スタイルの特徴を見ることができる。

このふたつの流れが合流した先に、琵琶と尺八を独奏群とする管弦楽曲〈ノヴェンバー・ステップス〉が姿を現すことになる。

この作品にとって、初演独奏者の鶴田錦史(琵琶)と横山勝也(尺八)は、きわめて重要な存在だ。ふたりは〈蝕(エクリプス)〉の初演者でもあった。武満は、琵琶の「さわり」や尺八の「ムラ息」などの雑音成分に、西洋音楽とは異なる地平を感じたようだ。作曲家は〈ノヴェンバー・ステップス〉の作曲に際し、「琵琶と尺八が

さししめす異質の音の領土を、オーケストラに対置することで際立たせるべきなのである」と考えていた。

その強い思いに鶴田と横山も共鳴する。鶴田は (実業家でもあったのでその資金力を活かして)、長野県御代田町にある武満の山荘の2軒隣に家を買い、作曲家との共同作業に備えた。横山は、武満の「できる限りの (音の) 持続」という要求に、身体トレーニングを積むことで応え、ロングトーンの持続時間を30秒も伸ばすことに成功した。劇画調ドラマも真っ青の取り組みようである。本日の独奏者である藤原道山 (尺八) と友吉鶴心 (琵琶) はいずれも、修行時代から同時代音楽と積極的に関わってきた。その意味で両者は、初演独奏者のふたりと志を共有する邦楽家である (なお、鶴心は鶴田錦史の直弟子にあたる)。

武満は〈ノヴェンバー・ステップス〉なるタイトルに、初演の「11月」に自らの仕事の「新たなステップ」を踏み出すという意を込めた。同時に箏曲〈六段〉などに倣い、「十一段」を表す言葉としてもこれを用いている。この11段は、2群のオーケストラによる管弦楽部分と、琵琶と尺八による独奏部分とからなる。両者は時折、重なることもあるにせよ、おおむね交互に登場する。ふたつの間を取り持つのはハープや打楽器。これらのパートが琵琶の「さわり」や尺八の「ムラ息」を模倣して、橋渡しをする。

終盤の独奏部分(いわゆるカデンツァ)は図形楽譜による演奏。それまでの独奏部分には、音高や奏法の厳格な指示と、リズムの曖昧な提示とが同居していた。カデンツァでは自由度がいっそう増している。この図形楽譜による即興的な演奏は、〈蝕(エクリプス)〉から受け継いだものだ。

そのカデンツァと、直後の管弦楽部分との断絶は、橋渡しがあるにもかかわらず 大きい。邦楽器と管弦楽とを「ブレンドすることは棚上げにして、違うものをただ そこに投げ出す」とした作曲家の姿勢が、強く表れている。

最後に独奏が戻り、長く余韻を残しながら曲を閉じる。 〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲: 1967年/初演: 1967年11月9日、ニューヨーク/演奏時間: 約19分 楽器編成/オーボエ2、クラリネット3、トランペット2、トロンボーン3、打楽器 (チャイニーズ・シンバル、 ゴング、銅鑼、鐘)、ハープ2、弦五部、独奏尺八、独奏琵琶

ベートーヴェン

交響曲 第2番 二長調 作品36

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) の交響曲第2番は、初演後しばらくの間、高評価を得られなかった。「若干の部分を短縮し、多くのあまりに風変わりな転調をなくせば、良くなるに違いない」(ウィーン再々演に際して/『一般音楽新聞』1804年8月15日号)

一方、ドイツ中部ライプツィヒではどうか。「その大変な難しさにもかかわらず、 曲を完全に味わえるように 2 回も演奏された」(ライプツィヒ再演に際して/『一般音楽新聞』1805年1月2日号)

聴衆の理解を深めるため、一晩に2度、第2番を演奏している。難しい、奇抜すぎる、でも理解したい、という聴き手の矛盾した叫びが聞こえてくる。初演後9年もすると、この姿勢はもっと積極的な色合いを帯びる。「私たちはなぜいつも耳に快く響くものだけを望むのか。私たちの心に衝撃を与えることを、そして、たとえいささか暴力的にでも慣れ親しんだものを超えることを、なぜ期待しないのか」(ミュンヘン初演に際して/『一般音楽新聞』1812年2月19日号)

この批評が出たころ、ベートーヴェンは交響曲第5番、6番をすでに初演し、シンフォニー作家としてドイツ語圏に確固たる地位を築きつつあった。批評からはそんな事情も透けて見える。

第1楽章 序奏付きのソナタ形式。どの批評も管楽器 (たとえば第2主題) が目立ち過ぎることを指摘している。この点も「風変わり」とされる一因。

第2楽章 ヴァイオリンが主題を奏でたあと、クラリネットとファゴットがそれを引き継ぐ。管楽器が単なる和声の埋め草から、メロディーを受け持つパートへと変貌している。

第3楽章 聴き手はメヌエットのつもりで聴き始めるが、その内実はスケルツォ。 第4楽章 ロンド・ソナタ形式。最大12度「落下」する冒頭主題を「奇妙」とする 批評も残る。ロンドなので、この「奇妙」な主題が楽章中、何度も登場する。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲: 1802年/初演: 1803年4月5日、ウィーン/演奏時間: 約32分 楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

R. シュトラウス交響詩〈ドン・ファン〉作品20

ドン・ファンといえば、伝説の好色家のこと。現代でもプレイボーイの代名詞として用いられる言葉だが、その起源は17世紀のスペインにまで遡る。名家の息子ドン・ファンが貴族の娘を誘惑し、その父を殺すが、父親の石像が晩餐に現れてドン・ファンを地獄へと引きずり込む。モーツァルトがオペラ化した〈ドン・ジョヴァンニ〉でおなじみのストーリーだが、この伝説はモリエールやバイロン、プーシキンらによってくりかえし文学の題材にされている。若き日のリヒャルト・シュトラウス(1864~1949)が参照したのは、オーストリアの詩人ニコラウス・レーナウの叙事詩。初版のスコアにはこの叙事詩から3つの場面が引用されている。簡潔に要約すれば、女性と快楽の讃美、ひとつの出会いに情熱を燃やし尽くしてまた新たな恋を求めるという信条の表明、そして愛と情熱の終焉という部分からなる。

1888年、シュトラウスは交響詩〈マクベス〉に続いて、この〈ドン・ファン〉を書きあげた。翌年、名指揮者ハンス・フォン・ビューローの推薦により、シュトラウスはワイマール歌劇場の副指揮者に就任する。その際、完成済みの〈ドン・ファン〉をピアノで披露すると、ワイマールの雇用主たちは感銘を受け、ぜひ自分たちが初演を行いたいと主張した。シュトラウスは作品が要求する技術的な難度に同地のオーケストラが応えられるか案じたものの、初演は大きな成功を収め、作曲者の名声を一躍高めることになった。

勢いよく跳躍するような冒頭主題はドン・ファンの放埓な性格を表現する。続いて優美なヴァイオリンのソロが奏でられ、ロマンスが始まる。しかし甘美な時間は長続きしない。ふたたびドン・ファンの主題が現れ、次の恋へと向かう。ホルンの勇壮な主題を経て新たな冒険が続くも、最後は息絶えるように終わる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

ブルッフ ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品26

ドイツの作曲家、マックス・ブルッフ (1838~1920) は早熟の天才として若くして注目を浴び、しかも82歳まで生きた長命な作曲家だった。多数の作品の中で、ずば抜けて知名度の高いのが、20代後半に書いたヴァイオリン協奏曲第1番である。1866年、音楽監督を務めていたコブレンツで、オットー・フォン・ケーニヒスレーフの独奏、自身の指揮により初演され、改稿を経て、68年にヨーゼフ・ヨアヒムの独奏により現行版が初演された。ヨアヒムは「ドイツ人は4つのヴァイオリン協奏曲を持っている。もっとも偉大なベートーヴェン、それに深刻さで匹敵するブラームス、もっとも豊かで魅惑的なブルッフ、内面的な心の宝石のメンデルスゾーン」と語り、ブルッフを大作曲家たちの列に並べた。

しかし、時流に乗ることなく保守的な作風を堅持したブルッフは、やがて時代から取り残されてゆく。第2番、第3番のヴァイオリン協奏曲も書かれたが、演奏機会は少ない。晩年のブルッフは「あと50年もすれば私の名前はヴァイオリン協奏曲第1番でしか記憶されていないだろう」と嘆いた。その予言はかなりのところ的中しているが、むしろ、この曲は作曲者の想像を超える評価を獲得したともいえる。1996年、イギリスのラジオ局が行ったリスナーの人気投票 Classic FM Hall of Fame では、古今の名曲を抑えてこのヴァイオリン協奏曲が第1位に輝いた。

第1楽章 前奏曲 アレグロ・モデラート 当初の構想では「序奏的幻想曲」。短い序奏に続いてすぐに独奏ヴァイオリンが登場する点や、切れ目なく第2楽章に続く趣向はメンデルスゾーンゆずり。情熱的で雄大な楽想が展開される。

第2楽章 アダージョ 独奏ヴァイオリンが憧憬に満ちた主題を奏で、管弦楽が柔らかな響きでこれに寄り添う。豊かでみずみずしいロマンが横溢する。

第3楽章 アレグロ・エネルジコ 勇壮な舞曲風主題に導かれるフィナーレ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲: 1888年/初演: 1889年11月11日、ワイマール/演奏時間: 約17分 楽器編成/フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール)、ハーズ、弦五部 作曲:1864~67年/初演:1866年4月24日、コブレンツ(初稿)、1868年1月7日、ブレーメン(改訂稿)/演奏時間:約24分

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

了/1 ^{名曲}

2/14 大阪定期

Program Notes

に生まれ変わったかのようである。 もうひとつは、同じ二短調交響曲であるベートーヴェンの〈第九〉だ。フランクは 終楽章について「〈第九〉のようにすべての主題がふたたび取り上げられる。しか しそれらは引用として再現されるのではなく、変形されて、新たな構成要素として

ンに求めるのはごく自然なことだろう。

於業草について「大弟儿」のようにすべての主題がふたたび取り上りられる。しかしそれらは引用として再現されるのではなく、変形されて、新たな構成要素としての役割が与えられる」と言った。そういえば、終楽章の喜びにあふれた主題は「歓喜の歌」とどこか共通した性格を持っている。フランクはベルギー生まれながらドイツ系の家庭に育ち、ドイツ音楽に深く傾倒していた。作曲時にはインスピレーションを得るために、ピアノに向かってバッハやベートーヴェン、シューマンらの作品を大音量で弾き続けたという。そんなフランクが交響曲の規範をベートーヴェ

第1楽章 レント〜アレグロ・ノン・トロッポ 序奏冒頭の陰鬱な主題が全体を統一する主要主題。主部でもこの主要主題を軸に闘争的な楽想が展開される。

第2楽章 アレグレット イングリッシュ・ホルンが第1楽章の主要主題から派生 した寂しげな主題を奏でる。中間部は弦楽器が小刻みに動くスケルツォ。後半で 寂しげな主題とスケルツォが重なり合い、緩徐楽章とスケルツォの融合を果たす。

第3楽章 アレグロ・ノン・トロッポ 烈火の勢いで開始され、チェロとファゴットが歓喜の主題を奏でる。金管楽器のコラール風主題が勝利を予感させる。前述のように既存主題を回想しながら、緊密で高揚感にあふれたフィナーレを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

ベルギー生まれのフランスの作曲家セザール・フランク (1822~90) は著名な作曲家には珍しく、代表作が晩年に偏っている。この交響曲ニ短調をはじめ、ヴァイオリン・ソナタイ長調、〈前奏曲、コラールとフーガ〉、ピアノ五重奏曲へ短調といった演奏頻度の高い作品は、いずれも晩年の10年あまりに書きあげられている。フランクの弟子であった作曲家ヴァンサン・ダンディによれば、1890年に弦楽四重奏曲ニ長調の初演が大成功を収めたことが「師の68年間における最初の成功」であった。このときフランクは満足げに「ようやく人々は私をわかりかけてきた」と語ったが、それから7か月後に世を去った。

交響曲ニ短調が初演されたのは、その1年前の89年のこと。当時、フランスの作曲家たちは自国における交響曲の再興に情熱を傾けていた。86年にサン=サーンスは交響曲第3番〈オルガン付き〉を完成させ、同時期にラロは交響曲ト短調を、ダンディは〈フランスの山人の歌による交響曲〉を作曲した。フランクもこれらの交響曲に大いに触発されたにちがいない。しかし、交響曲ニ短調の初演は苦難に見舞われた。パリ音楽院管弦楽団の団員たちの反対を押し切って、指揮のジュール・ガルサンが初演にこぎつけたものの、聴衆の反応は冷淡だった。ある音楽院の教授は「交響曲にイングリッシュ・ホルンを使った例など聞いたことがない。これは交響曲ではない」と非難し(実際にはベルリオーズの〈幻想交響曲〉という偉大な先例があるのだが)、作曲家グノーは「無能の主張が教義にまで達している」と酷評した。同じグノーがサン=サーンスの〈オルガン付き〉に対して「フランスのベートーヴェン」と称賛したのとは対照的である。しかし作曲者の死後、作品は次第に評価を高め、やがてフランスの交響曲史上屈指の傑作とみなされるようになった。

フランクが交響曲を書く際に、着想源になったと思われる作品はふたつある。ひとつは自作の交響的大曲嬰へ短調。60年から62年にかけて作曲された〈大オルガンのための6つの作品〉の第2曲にあたる。この曲の主要主題と交響曲ニ短調の主要主題の類似性はしばしば指摘される。いずれも楽章間で共通する主題を用いる循環形式が採用されており、中間楽章が緩徐楽章とスケルツォを兼ねているのも同じ。かつて交響的なオルガン曲として構想したアイディアが、本物の交響曲

作曲:1887~88年/初演:1889年2月17日、パリ/演奏時間:約37分 楽器編成/フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、 ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハーブ、弦五部